

被爆証言

戸田照枝

(二〇〇五年八月七日)

平和を祈る会での証言)

私は、一九三二年一月七人兄弟の末子として、軍港に近い宇品町に生まれました。軍港宇品は、全国から、毎日、何千、何万の兵士が集められ、戦場に向かって出発をしていく町でした。愛する家族と、或いは恋人と、友人と、恩師と別れ、再び帰ることのない日本を後にして出発するという、送る人も、送られる人にとっても本当につらい港町でした。私の直ぐ上の兄(五兄)は、私が小学校入学の一週間前に、一晩の高熱で病死、父は、私が小学校三年生の時、風邪がもとで肺結核のために病死、翌年、次男が結核の感染で病死、翌年三男が戦死、翌一九四五年三月長男戦死、四男は特攻隊へ、姉は夫を軍隊にとられ、幼児二人を連れて田舎に疎開、と母にとっては、涙の乾く間もない、つらく悲しい日々でした。

戦争が、段々と激しくなり、毎日のように敵機が日本の上空を飛んであちらこちらに爆弾や、焼夷弾を落としておりました。もう学校では勉強どころではありませんでした。若い元氣な男の人は、戦争にとられ、残ったのは、老人、女性、子供の弱い者だけとなりました。

小学生の殆どは、親元を離れて、田舎の山深くのお寺や民家に疎開させられ、子守りや、家事の手伝い、更には畠の手伝いをしたり、山に登って松の切り株を掘り起こし、飛行機の燃料にする松根油を絞るために松の木を工場に運んだりして、小さくても一生懸命でした。食べ物といえば、いもの蔓とか、小さなジャガイモとか、大根葉とか、パッタとか、イナゴとかで、お米の御飯などはメッタに食べることはありませんでした。何時も、お腹はペコペコでした。七歳から一歳くらいの子ども達で、夜になると家が、お母さんが恋しくて、お寺の広い本堂にみんなで肩を寄せあって泣いたそうです。泣いても、騒いでも家に帰るわけにはいきません。戦争に勝つまではと、一生懸命我慢しました。

中学生以上は、学徒動員として、戦争のための兵器を造る工場へ働きに行ったり、建物の疎開の作業にも駆り出されておりました。建物疎開とは、町中の住宅は殆どが木造住宅の上、建物そのものが密集して建てられているために、爆弾や焼夷弾による延焼を防ぐために防火地帯を作るといことでの作業でした。ですから、留守家庭を守るべき女性、つまり主婦もこの作業に出ることは当然とされておりました。また学生、生徒は夏休みなどもありませんでした。

食べるものもない、着る物もない、どんなに暑くても夏休みもない時代、汗まみれの、泥まみれの労働の最中の原爆、あの日のことだけは生涯思い出したいくない、誰にも話したくない、誰にも触れられたくないという思いで、隠れるようにして生きてきました。思えば、誠に卑怯な、無責任な生き方だったかも知れません。

当時、私は十三歳、今言う中学二年生、昭和二十年四月から戦争参加のために「婦女子教育」という謳い文句の国鉄の試験に、市内、市外の学校から一、二名が集められて四十名弱の寄り合いで、毎日、通信関係の研修を受けるとい作業を課せられておりました。あの日も私は、戦闘帽に白いブラウスのモンペという姿で、宇品町の自宅から広島駅に近い松原町の鉄道局まで(爆心地から一・五km)一時間くらい歩いて勤労動員に出待っておりまして。級友(三七〇三八名)とガヤガヤおしゃべりしながら作業開始の合図を待っておりまして。ふと誰かが「アツ、アツ、アツッ!」と叫び、みんなが空を見上げた瞬間、ピカッと辺り一面が光りました。写真のフラッシュを何百、何千も一度に焚いたように思いました。また、稲光を何倍にもしたような激しい光でした。と同時に耳をつんざくようなドーンという爆音がし、電柱も家屋も吹き飛ばすのではないかと思うような爆風も過ぎていきまして。私は地面に叩きつけられた上、後の鉄階段が腕の上に落ちてきました。辺りは、朝だというのに何故か真っ暗でした。しばらくの間、気を失っていたのではなかつたかと思いますが、その辺りは定かではなく、ただ音のしない、死の世界はこのようなどころではと思うようなときが暫く続きました。やがて「助けて、お母さん」「アツィヨ」「耳がとれたよー」「目が飛んだよー」と泣き叫ぶ声、その中で、私は暗闇の階段を抜け出そうとして這いずり回っておりまして、友だちの、私を呼び声に必死に起き上がると、少しづつ明かりが見え始めました。目の前には同じように作業に来ていた戦闘帽にグートル姿の中学生五、六十人や女学生が全身火だるまになって逃げまどっておりまして。身体中がボ-

ポーと燃えておりました。辺りは瓦礫の山、その下で助けを求めている人、血みどろで倒れている人、ハッと気がつくとも周りはパチパチと火が燃え始めておりました。今まで私の前に立って、髪を編んでくれていた友だちの大谷さんを捜しました。彼女は十メートルくらい先に飛ばされ、大の字になって、白い目を見開いたまま倒れておりました。私と一緒に逃げようとしたが、小さな私の方ではどうすることもできませんでした。「ご免なさい、ご免なさい。」とつぶやきながら、メラメラと燃える火の中をとにかく通り抜けました。

やがて、たどり着いたところは東練兵場（今の広島駅新幹線口辺り）でした。一体何が起きたのか、何をどうしたらいいのかが分からず、ただ人々の中で茫然としていると兵隊の一人が「敵機来襲の恐れあり。広島を離れよ」と命令しているのが聞こえました。でも母の待つわが家へ帰りたくて、「宇品の方はどうなっているのでしょうか」と兵隊に尋ねました。すると「宇品は全滅じゃ、女も裸で逃げよる。帰る道もない。」との返事、私は半分諦め、泣きながら多くの人々と一緒に避難をすべく歩き始めました。周りは一面瓦礫に覆われていました。人々の顔は赤黒く何倍にも腫れあがり、皮膚はワカメをぶら下げたように垂れ下がり、全身裸で黒い血だらけの人も沢山おられました。大八車に乗せられた女の人には全身焼けただれて肉まで見えるような姿になっておられました。「誰か着るものを貸して下さい」と頼む人もおられました。キャッキャッと叫びながら走り回る人は、余りにも大きなシヨックに気が狂われたのでしょうか。焼けこげて、その場で亡くなられた人、避難の列の中には、バタバタと倒れる人、水を求めて叫びながら逃げる怪我人など、まさに阿修羅の列でした。逃げるときには手を繋いでいた友は、いつの間にか姿が見えなくなっておりました。逃げる途中で長い鉄橋を四つん這いになって渡りましたが、枕木から小さな炎や煙が上がっているところもあって、足が竦みました。おまけに列車がいつ迫ってくるかも分からないという、危険な逃避行でもありました。今思っただけでも、身体が震えます。

何時間歩き続けたでしょうか。一日中さまよい歩き、さすがに疲れて山陰に腰を下ろしました。ここまで逃げてきたものの、母のことが心配でどうにもならなくなつて「やっばり帰ろう」と再び同じ道をたどることとしました。今度は川を泳いで渡りました。水を求めて川に入り、力尽きたのでしよう、幾体もの遺体が浮いておりました。その中をかき分けながら猛ったように泳ぎました。何処をどうやって帰ったのか、よく分からないまま、倒れた家の屋根の上をヨロヨロと歩いて自宅にたどり着いた時には、もう夕方方の七時を回っておりました。全壊した家の前で、母がオロオロしながら私の帰りを待っておりました。母はその日、配給所に配給物を頂きに行き、列に並んでいて、丁度自分の番になってテントに入った途端のこと、テントが覆い被さったため、火傷も負わず、奇跡的に助かりました。後（ウシロ）の人々は全身の火傷で殆どの方が亡くなられたようでした。夜は自宅はとても寝られないような状態ではないので、川端の防空壕に隣組の人々との共同生活とならざるを得ないという状況でした。ただ実際は暑くて、星空のもとでの生活が続きました。日中は亡くなられた人達の遺体が、あちらこちらで焼かれて、その臭いと夜間は空に赤く映る炎と青い燐光が見えました。それらも異常な環境の中では、恐怖心もわかないままに放心状態でした。

翌日、母と二人で、大竹市から国民義勇隊員として作業に来たはずの母の弟（幼児を残して妻に先立たれた）と同じく大竹市から女子挺身隊員として広島に来ていた母の姪を捜しに出かけたのですが、御幸橋の所まで来ると橋の上は遺体で埋め尽くされており、思わす足が竦んでしまいました。母が「自分一人で行くから、帰って待つように」というので直ぐに引き返しました。御幸橋の下も、人や馬の死骸で埋め尽くされていました。前日（日曜日）その川一川といっても瀬戸内海の河口で大きな船が行き来するような川ですが、仲良しの五人の友人と泳いだとき、水は青く透きとおるほどきれいでした。楽しく語り、声を出して笑いあって泳いだ友だちも、作業に行ったらま帰ってきませんでした。美しくかった川も死体と木材とゴミの浮かぶ川に変わってしまいました。

あの日から六十年経った今も心に突き刺さって離れないこと、それは私の前に立って、髪を編んでくれていた大谷さんのことが出来なかったこと「ぬぐい得ない罪を背負って。

沢山の尊い命を奪った原爆、そして戦争、どんなに憎んでも憎みきれない思いでいっぱいです。再びこのような悲しみ、苦しみを繰り返してはならないと思います。生命ある限

り、ヒロシマの声を、平和への願いを叫び続けていきたいと思えます。
どうぞこの地に神の御心がなされますように。神様の限りないお支えと御導きを祈りま
す。

終わりに、広島詩人、深川宗俊の詩と短歌に私の思いを託しお伝え いたします。

小さな骨

深川 宗^{むね}俊

早春の

ヒロシマの川の

透きとおる水底に

ふとみつけた

小さな骨

ふさふさした黒髪の少女か

つぶらな瞳の少年か

小さな骨

閃光と炎とさびた街の

網膜に灼きついた

あの日の死の幻影

ああ川底にしがみつき

流れに手をあげる

小さな骨

人間のかなしみのささやき

人間のかなしみが

怒りと力になることの

ささやき小さな骨よ

平和への

人間のちからを信じよう

人間の

平和へのちかいを

短歌

目玉飛びでて盲となりし学童は

かさなり死にぬ橋のたもとに

正田 篠枝

服焼けて裸身となりし女学生

ただれた両手で恥部をかくせり

河内 格

息すでに引き取りし子を

ゆさぶりて

泣き叫ぶは母か瓦礫の上に

荘内 伍